
生まれ変わったらの話

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わったらの話

【Nコード】

N9342V

【作者名】

蓮

【あらすじ】

西英。愛してほしいと願う、寂しがりやさんのお話。 お題サイト様より頂いてきたお題を使って書いてみました。相変わらず全力でシリアスです。ただしこれ、大分前に書いたお話です。 pixivやブログにて、同じものをアップしています。

口を開けば憎まれ口や皮肉、嫌味しか出てこない自分の性分と癖に、何度も嫌になったものだ。嫌われた理由の中に（今までやってきた事もあるのだろうが）その憎まれ口なども多少は含まれているだろうし、それさえ無ければもう少しくらい誰かに愛されるだろうかと何度考えただろう。

だからと言って、今更直しようが無いのだが。

* * *

「お前さ、もし生まれ変わって国以外のものになれるとしたら・・・何になって、どうしたい？」

これから眠りにつくというこの時になって突然恋人が言い出した事に、アントーニョは戸惑った。否、戸惑ったというより、怪訝に思っただけで思考が止まったというほうが正しいか。

兎に角咄嗟にその質問に答える事が出来なかった。

我が恋人、アーサーが突然不可思議で電波な事を言い出すのは今に始まった事ではないけれど、これはあまりにも突飛すぎる。しかも何とも困る質問だ。

生まれ変わったら、と言われたって正確には国は生命では無いのだから消滅はすれど死んだりはしない。年老いしも寿命で、なんてことも無いだろう。つまり、魂というものが昇天することは無い。生まれ変わるとか言われても、答えられる者など一体何人居るだろう

うか。

否、答えられるものなら何人か心当たりはあるがそれはあくまで順応性があつて彼のそういうところに付き合つてあげられる人物だけだ。

つまり、アントーニヨはそのどちらも殆ど無いのだから（慣れれば大丈夫だろうが未だに彼の突飛な発言には慣れていない）、彼のその質問には早々答えられない。

「・・・何や急に」

彼のそういうところを含めて好きなわけであつて、決して嫌だと思ふ事は無いけれどやはり不思議なものは不思議だ。

「いいから答えろ」

疑問に思ったから質問したというのは彼も同じだろうに、アントーニヨの問いには答えずに彼は自分の質問には答えさせるつもりでいるらしい。何ともまあ横暴な話だ。

だがそれも彼を構成する要素の一つだ。いがみ合つていた昔ならいざ知らず、今はもうアントーニヨはそれも受け入れる事が出来る。

「んー・・・普通の人になつて“人”生つちゆうもんを楽しんでみたいなあ」

国である限り、人生というものを経験することは不可能だ。人とほぼ変わらず生活をしてはいるが、死ぬ事は出来ないし自由に出来ない。それは確実に人ならざるものだ。

だからアントーニヨは、もし彼の言う生まれ変わりというものを経験出来るというのなら（本当にあくまでも仮に、だが）是非人生を楽しみたい。

死ぬ体というものを体験してみたい。

「………つまんね」

それなりに考えのある意見であったつもりなのだが、彼はどうもお気に召さなかったらしい。気難しい彼だから、しょうがない事なのかもしれないが正直面倒臭い。

一体どんな答えを、彼は望んでいるのだろうか。

「せやったらアーサーは何になってどないしたいん？」

人の答えにケチをつけたくらいだから、彼はよっぽど面白い回答を持っているのだろう。

いや、もしかしたら何も考えていないかもしれない。興味本位で訊いただけかもしれない。まあそれでも訊いてみる価値はあるだろう。

そんな軽い気持ちで訊ねた事だった。

「植物」

短い返事が返ってきて、へえ、と反応しそうになって次にはフリーズしていた。

植物といえば、声を発さず、それどころか動く事すらせず成長し、呼吸をし、酸素を吐き出し、生きてはいるが正直生物という認識が薄い生物である。しかも寿命は種類によって驚く程短い。

「はあっ!?!」

思わず声を荒げてアーサーを仰ぎ見た。驚いた反応を見せたアントーニョに、アーサーは振り向きもせずただ背を向けたままだ。

成る程そんな回答を持っているなら単純に人と答えたアントーニヨの答えはつまらない筈だ。

しかし何処までこの男は植物が好きなのだろうか。幾ら植物好きでも、生まれ変わったら植物になりたいなどと思う者などそうそう居るまい。

「へ、へえ……で、何したいん？」

植物なのだから何をしても何も無いだろうが、彼の質問の中に「何がしたいか」というものが存在するのだからこちらがそれを訊かないわけにはいかない。

多分「植物なんて何も出来ないに決まってるだろ馬鹿かお前は」とでもいう風な返答が来るのだろうと思っていたのに、彼はすぐには答えず数秒間を空けてこう答えた。

「愛されたい」

部屋の温度がいつきに冷えた気がした。

それは彼の本音に限りなく近く、いやそもそも本音そのものだろうという事は、アントーニヨにはすぐに解った。彼はいつでも愛に飢えていた。愛されたいと誰よりも強く願っていた。

「植物は喋らないし動かない。だったら、嫌われる事なんて何も出
来ないだろ？植物は、愛でられるだろ……？」

彼は過去に酷い事を沢山してきたし、口も悪いし開けばすぐに人
を罵る言葉が出てくる。故に彼の周りには誰も居ない、と彼自身は
思っている。

その事は、アントーニヨもよく解っていた。だから今まで一心に
愛してきた筈なのだ。だが彼はそれを甘受しながらも、心の底から
信じる事は決して無かった。寂しいとは思ったが、仕方のないのだと
割り切っていたというのに、どうやら間違っていたらしい。

彼の今の台詞は、彼の人格を含めた全てを愛すアントーニヨを否
定する言葉だった。

「あほか。お前が植物になったところで誰も愛してなんかくれへん
わ」

ちょっとした苛々。いつもは寛容に許しているが、今回ばかりは
この発言には我慢ならなかった。故に出てきた、キツイ言葉。

「そう、だよな……。お前の言う通りだ」

目に見えて落ち込んだアーサー。此方を向いて、困ったように、
寂しさを押し隠すように、控えめに笑った。

* * *

元々眠かったのだろうか。あの痛々しい笑みを見せて数分しないうちにアーサーは眠りについた。

「少なくとも、俺は植物のお前なんか愛してやれへんで……。植物に興味あらへんし、植物に人格は無いやろう……？」

右手でアーサーの頭を抱え込み呟く。一番伝えたい事だったのに、痛々しい彼の笑みを見た後アントーニヨは何も言えなくなってしまった。

本当はアントーニヨも眠かった筈だったのに、眠気も吹き飛んだ。

「そんなくらい、理解してやアーサー……」

か細いくらいに寂しげな声で呟くアントーニヨ。びくりと、アーサーの体が動いた気がした。

(後書き)

お題サイト「18と5」様よりいただいたお題、「生まれ変わったらの話」でした。

こんなお題を見てまず最初にこんなシリアスな内容が浮かぶ私の脳内はもう末期だと思いましたがこれが私の通常運転なのでもうよしとします。

普通此処は甘いネタが浮かぶもんだよ・・・ねえ？

私の小説のアーサーはいつでも愛に飢えています(キリッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9342v/>

生まれ変わったらの話

2011年10月9日13時16分発行